

正かなづかひ 理論と實踐

内容見本

第2號

目次

序文・「国語の改革」と云ふ事について	野奇 <small>のぎ</small> 健秀 <small>たけひで</small>	3
仮名遣ひおよび字体の可読性に関する調査	伊川 清三	9
特輯「正義と宗教」		19
宗教の信者は《何》を信じてゐるのか——宗教の世界観についての体験に基づく考察	松永 英明	20
わたしの仮名遣ひ流儀	松永 英明	45
ヨーロッパ文明と宗教	野奇 健秀	48
基督教初期についての一考察	平頭通 <small>へいとうと</small>	51
聖書——どんな本ですか	押井 徳馬	56
キリスト教の三位一体——教理と信仰	野奇 健秀	66
キリスト教における聖書の意義	野奇 健秀	70
日本人の宗教・神道	野奇 健秀	73
神道と日本人	高坂 相 <small>かうさか あり</small>	76
天皇についての一考察	名賀月 晃嗣 <small>なげつき ありつぐ</small>	80
「國家神道」なるもの	野奇 健秀	85
大曼荼羅御本尊について	酒井 景一朗	88
宗教不信——なぜ?	押井 徳馬	94
映画と正義	出入	100
オタクが語る正義と宗教	佐藤 俊 <small>さとう すく</small>	103
短歌を作る時に心がけてゐること／釋教歌	酒井 景一朗	113

ブックガイド 118

小特輯・音楽

フォーレ『レクイエム』評 紫^{ゆかり} 139

世界の國歌四方山話 かふし 144

78回転レコードの楽しみ 押井徳馬 161

その他

コイン蒐集初歩の基礎 平頭通 164

天皇の存在意義 野中 浩大^{ひろだい} 168

私の福田恆存論 野崎 健秀 172

ニッシャのもとに集へ!! 伊川 清三 176

愛・おぼえてゐますか 發動篇（四齣漫畫） 佐藤 俊 203

紙の闇黒日記 野崎 健秀 204

編輯後記・奥付 村山 佑^{たすく} 206

寺田寅彦「地震に伴ふ發光現象に就て」（英文和譯、横書き） 表紙 野崎 貴子 212

表紙 野崎 貴子

題字 山口 翔平

口繪 押井 徳馬

カット 野崎 健秀

組版 押井 徳馬、松永 英明

伊川 清三、村山 佑

仮名遣ひおよび字体の可読性に関する調査

伊川清三

はじめに

「国語改革」なるものが断行せられてから、七〇年近く経たうとしてをります。いまや、日本人の大半は新仮名遣ひと新字体による教育を受けてゐるといふことになりました。正仮名遣ひおよび正字体に対して一般的な印象とはどのやうなものでせうか。おそらくは「難しい」だとか「古臭い」だとか、おほよそ良い印象は抱かれてゐないでせう。

本稿ではアンケートによる正仮名遣ひの可読性を調査し、新旧仮名遣ひの差異が可読性に影響を及ぼすものではないといふことを再確認するといふものであります。方法として新仮名遣ひである文章を正仮名遣ひに改めたものを讀ませて、その可読性について尋ねるといふものです。その回答から、日常正仮名遣ひに触れてゐない人たちはどれくらゐ正仮名遣

ひの文章を理解せられるかを明らかにするものであります。

一部の人達にとつては、この調査結果については目新しいものではないでせう。本誌の読者であれば、正仮名遣ひは習得してゐるでせうから、そのときの経験と照らし合はせて、正仮名遣ひの読み書きはそれほど困難なものではないと確信してゐるはずでせう。そもそも、わざわざ調査するほどのものではないかもしれませぬ。少し考へてみればわかります。正仮名遣ひで記された文章と新仮名遣ひで記された文章を見比べてみれば、仮名遣ひの差はさうありませんし、少し工夫すれば仮名遣ひの存在しない文章を書くこともできます。

さて、本題に入る前に「可読性」なるものについて定義しなければなりません。本稿では「可読性」とは文章の読み易さおよび理解度を示すものとします。ただ、読み易さも理解度も大変抽象的な概念であります。読み易さといふのは、も

ちろん仮名遣ひに左右せられますし、行間や字間といった組版要素にも大きく左右せられます。理解度も何を以て理解したか客観的に数値化せられず、主観によるものです。これについては認知科学の分野になつてしまひますが、その分野でさへ被験者の主観に頼つてゐるのが現状であります。つまり、アンケートで問ふこの文章は読み易いかどれくらい理解できたかは回答者の主観によるものといふことを留意していただきたいです。

アンケート方法

アンケートに用ゐたサンプル文章は平成二三年一二月七日付の毎日新聞東京版の社説「自動車関連税 財源なき廃止は無責任」であります（稿末の附録に原文を掲載）。

アンケートは「仮名遣ひ調査」と「字体調査」の二種類を用意いたしました。前者は当該社説の仮名遣ひを正仮名遣ひに改めたものを被験者に配り、現代仮名遣ひと比較したときの読み易さや、どれくらゐ文章の内容を把握せられたかを回答してもらふものです。また、後者は対照実験であり、当該社説の字体を正字体に改めたものを配り、同様の質問に回答

してもらひました。

前者のサンプル数は八九人、後者のサンプル数は五五人であり、筆者が在籍する工学系単科大の学生がほとんどであります。また、工学系単科大の悲しいところですが、回答者のほとんどが男性ですから、男女別の数値は省略いたします。

仮名遣ひ調査

仮名遣ひ調査では八九人の回答数があり、「現代仮名遣ひと比較したときの文章の読み易さ」、「文章の理解度」、「正仮名遣ひをどの程度学習してゐたか」、「正仮名遣ひに対する印象（自由記述）」について尋ねました。

仮名遣ひ調査では三〇代ないし六〇代以上の年代からも若干ながらアンケートを廻取できました。

「現代仮名遣ひと比較したときの文章の読み易さ」を表として示します。過半にあたる五十二人が正仮名遣ひで書かれた文章を現代仮名遣ひと同程度の読み易さと回答してをります。やや読み辛いと回答したのは二十七人であり、とても読み辛いと答へたのはわずかに七人でありました。特に注目してもらひたいのは、六〇ないし八〇代では、逆に現代仮名遣ひ

特輯 「正義と宗教」

本號の特輯には「正義と宗教」と云ふ題を選んだ。「正義」とは、イデオロギーの事であり、組織に關はる事であり、現世的の事であり、政治的な人間の動機の事である。「宗教」とは、道徳の根幹を支配し、政治以前の個人の生き方にかかはるものである。正義と宗教とは、似てゐるやうで、本質の部分で大きな違いがある。しかし、どちらも人間の歴史を支配する精神的なものとして、深く考へられねばならない。いづれも文明の動因ともなる上、文明を超越して獨自の生命を持ち得るものである。



ヨーロッパ文明と宗教

野寄 健秀

吾々は歴史と云ふと、古代・中世・近代の分類を、當り前のものとして受容れてゐる。ところが、よくよく考へてみると、案外この分類は事實に即してゐない。元來この分類法はヨーロッパ史の爲に考案されたものだつた。ところが、實際の「古代ヨーロッパ」と、近代以降のヨーロッパとは、全然別物なのである。

所謂古代、ヨーロッパはローマ帝國の支配下にあつた。それが東西に分裂した擧句、西ローマ帝國は移動してきたゲルマン民族の爲に滅亡してしまふ。そして、近代以降のヨーロッパとは、この、移動してきたゲルマン民族によつて新たに創造された文明なのである。政治的にローマ帝國と云ふ外觀を示したローマ文明は、「古代」末期に壽命に達し、「中世」の間に消滅した。西ローマ帝國が滅亡した後も東ローマ帝國が暫く西方に影響力を持つてゐた事は知られてゐる。けれども、じきに東ローマ帝國はただローマ文明の遺産を保存するだけ

の役割を果すやうになつた。

ゲルマン民族は「近代」以降、東ローマ帝國或はイスラム圏に保存された知識を手に入れる。ルネサンスである。吾々は從來、ヨーロッパ文明が「中世」に知識を失ひ、暗黒期を経て、東方の恩恵によつて再生を果したと考へてきた。しかし、寧ろ、「古代」のローマ文明が滅び、それと共に知識が失はれ、全くの新文明として「近代」のヨーロッパ文明が出現して、改めて知識を求めたものと考へた方が適切である。東方で保存されてゐたのはアリストテレスの學問であつた。

ヨーロッパのルネサンスは、「中世」に先行的なものがあつた。「近代」にはつきりと形をとつて出現するのだが、アリストテレスを始めとすると先行文明の學問をそつくりそのまま受け入れたものであつた。そして、重要なのは、ルネサンスで手に入れた先行文明の知識を、「近代」のヨーロッパ人はそつくりそのまま保存したのではない、と云ふ事である。彼等は

キリスト 基督教初期についての一考察

平頭通

この度は、オーソドックスな宗教論と云ふ事で、私は基督教初期のあれや此れやを書いて行きたいと思ひます。私自身、専門家ではありませんので、雑な議論を披露する事となりませんが、御容赦頂けると幸ひです。先に結論を述べておきます。

現在の基督教正統教派（オーソドックス）の成立ちは、様々な「皮」を剥いで剥ぎ捲つた末に出来上がったものであると言へます。其の辺りの事情を基督教成立から異端（ヘテロドックス）との対決を通して書いて行きます。

基督教の発生は、ナザレのイエスによる猶太教律法学者やパリサイ派等の既存教派によるガチガチに凝固まつた聖書解釈に対する批判から始つてゐます。此の辺りの事情は共観福音書に詳しいので、一々例示するのは控へます。唯、イエス自身の側に附く人々に対しては愛と奇蹟とを示しつつも、律法学者やエルサレム神殿の商売人等の既存教派へは容赦の

ない批判行動を示してゐる点は見逃す事は出来ないと思ひます。先づ、此の点は踏まへておいたほうがいゝでせう。

次の段階として、初期の基督教徒はどんな感じに信仰してゐたのかですが、思ふに現在の加特力カトリックよりもつと素朴で大らかな信仰をしてゐたのだと思ひます。当時は、三位一体論だとか、使徒信条のやうな教則などは無く、唯、信仰を一にする人々が定期的に集會に參集し、自らの信仰を確かめ合ふ。そんな事を繰返してゐたのだと考へたいです。私が思ふに、○聖母マリアの処女懐妊 ○神の下の平等 ○基督の奇蹟 ○基督の復活 ○神の愛への信頼 ○隣人愛、などの教へは当時からの信仰に在つたのだと信じたいです。時に羅馬ローマへの伝道の成功を期に、基督教の勢力廓大が羅馬帝国の上層部の耳にも這入るやうになるに及んで、或る種の危機感を覺えたのか、基督教徒迫害にまで発展した歴史もあります。併し乍、其の迫害に対し抵抗の態度を示す事はおろか、神に対

聖書——どんな本ですか

押井 徳馬

「これまで聖書を読んだことがありますか」

この質問に「はい」と答へる人の方が少ないでせう。

しかし、聖書を一度も読んだ事のない人でも、「豚に真珠」「目から鱗うろこ」「狭き門」といふ言葉なら御存知かもしれません。実は、これは聖書に由来する言葉なのです。エデンの園、ノアの方舟、モーセ（モーゼ）と聞くだけで、それ／＼どのやうな物語なのか、すぐ頭に思い浮かぶ人も少くありません。

我々が日常的に用ゐる「西暦」も、イエス・キリストが生れた（と思はれてゐた）年を起点として、それ以前をB.C.（英語で「キリスト前」を意味する Before Christ）、それ以後をA.D.（ラテン語で「主（キリスト）の年」を意味する Anno Domini）と表現してゐます。

日本人にキリスト教徒を自称する人が少なく、読んだことのある人も少ない割には、何故か日本人に多くの影響を与へてゐる、そんな本なのかも知れません。

いつ、誰が書いたか

伝統的な意見では、聖書を最初に書き始めたのは、ヘブライ人奴隷をエジプトから脱出させた指導者である「モーセ（モーゼ）」（諸説あるが、西暦前一三〇―一五世紀頃？）であるとされます。最後に書いたのは、新約聖書の「黙示録」を書いた使徒ヨハネで、西暦一世紀のことです。キリスト教が西欧で最も広まつてゐるので「西洋の本」だと思はれがちですが、実際には、書かれた場所も内容も、イスラエルなど中東を中心としてゐます。

実は、聖書は一人が書いた一冊の本ではなく、幾世紀もかゝつて、およそ四十人ものが何十冊もの本を書き上げた集大成なのです。この年月とは、日本でたとへるなら、聖徳太子の時代や、「古事記」「日本書紀」の書かれた時代に書き始められた本が、平成の現代になつてやうやく完成したやうなものです。それだけ長い時代の重みのある本なのです。

一 聖書筆者が誰なのかについては、聖書本文の記述や伝統的な見解を無視して、文体から筆者を推測する説（高等批評）を唱へる学者も一部ありますが、この記事では、伝統的な見解を示します。

キリスト教における聖書の意義

野寄 健秀

キリスト教の三位一体は「世界の創造者への信仰」「奇跡の人・キリストへの信仰」「人間が明かにしつつある立派なものへの信仰」が一つの信仰である事を意味してゐる。斯うしたキリスト教の信仰は、日本人には甚だ理解し辛い。日本人にはそれらの信仰は全てばらばらのものであるからだ。然るに斯うした統合的な信仰を基に、キリスト教は教理を発展させた。父と子と聖霊への信仰を基盤に置いた事はキリスト教のポイントである。

そして、屢々「神について」「キリストについて」の信仰は問題にされるが、寧ろ「聖霊について」の考察こそが重要である。聖霊の働きを認める事は、キリスト教が神学を発展させた一方で、原理主義的発想を拒否し得た最大の理由だからである。

現代の「アメリカ保守主義」の一つとしてキリスト教の或種の立場の存在が指摘される。即ち、聖書の記述を全て事実

と看做して、進化論を拒否し、創造論を主張する立場である。実際は「保守的」と言つても福音主義であり、プロテスタントであるわけだが、日本人には「保守的なプロテスタント」なる概念は理解し難い。しかし、「聖書に記述されてゐるから真実である」と考へる発想は、聖書に直接つくプロテスタント特有の発想であるが、斯うしたプロテスタントは発生当初、カトリック教会からは異端であると見られた。そもそもキリスト教では、聖書は決して「絶対の聖典」ではない。

キリスト教の信仰と教理は具体的には聖書をもつて成り立っている。この点から言えば、キリスト教は宗教学者のいわゆる「經典宗教」(book-religion)のようにも見られるが、それはイスラム教や儒教などとは違つて、この經典成立よりも福音の宣教が先行し、現在でも、聖書あたかも跪坐して拝

神道と日本人

高坂 相

私たち日本人は、暮らしの中で神社と付き合つてゐる。家に神棚がある人も少なくない。商賣をしてゐる家なら尚更だらう。會社の敷地内や屋上などに神社を勧請してゐるのもよく見かける。氏子・崇敬者といふ形で神社に關はつてゐない人でも、初詣、初宮参りや七五三、安産や合格の祈願に鳥居を潜ることがある人が多いのではないだらうか。

キリスト教などの宗教の信者もしくは無神論者で、その立場を貫かうとする人は、神社参拜をはじめとする神道的要素を生活から嚴格に排除してゐる人もゐるだらうが、多くの日本人は神社と付き合ひながら暮らしてゐる。

かういふ日本人の暮らしの中にある神道の在り方に對して、そんなものは宗教ではないといふ批判もある。また、必ずしも神道に反對の立場ではないが、眞摯に宗教的なものを求めてゐる人にとつて、暮らしの中にある神道（定義の問題はあらうが、神社神道と言つておく）はあまりにも頼りないものと感ぜられるに違ひない。神社神道は果たして宗教なのかと。

教派神道や神道系新宗教ならば、宗教としての敷居を意志的に跨いで入ることになるから、いかにも宗教らしいと思ふだらうが、神社神道は宗教としての敷居が低過ぎるのではないかといふ疑問は、當然起こつてくるだらう。

ここで發想を轉換して考へてみよう。日本人にとつて神社神道は、宗教としての敷居が低いのではなく、普通の日本人はすでに敷居の内側にゐると考へてみればどうだらう。神道がいゆる宗教らしからぬものであるから、神道の内側に暮らしてゐることがわからないのだと。實際、神道を學ぶと、日本人の生き方や價值觀は神道そのものであると思へてくる。

神道の本を讀むと、次のやうなことがわかつてくる。存在に先立つ絶対者としての神を認めない、すなはち神は内在してゐるといふこと。神は唯一者ではなく、多神教であること。神は全能でもない。神道の祭祀は、地靈・穀靈・祖靈などを祀り、共同體の繁榮を願ふものであること。自然の營みへの畏れと感謝に基づき、自然との共生思想。神とは「尋常ソツネなら

天皇についての考察

名賀月 晃嗣

外國のことはさておき、日本の國の正義について考へようと思ふとき、天皇といふ存在を無視することは出来ない。亂暴且つ端的に言へば、日本に於いては、天皇の意に適ふことが正義であり、逆らふことが悪である。

いやいや、今の世はさうではないと思ふ向きもあるかも知れない。しかし、實際に天皇の意が明かにされたときに其れに對抗出来る程、政府や國民は強いと言へるだらうか。(對抗することの是非は、此所ではさておく。)

嘗て増原内奏問題といふ事件があつた。事は國防についての昭和天皇の思し召しを増原惠吉といふ大臣がうっかり漏らして了つたことに始まる。彼は天皇を「政治的」に「利用」したと批判された。裏を返せば、批判者は、天皇には政治的な利用價值があると認めてゐるのである。

此より後、天皇に依る正義を考へる爲に、天皇といふ存在がどういふ存在であるのか、論者なりの見方を述べようと思ふ。

日本の國と天皇

天皇といふ存在は日本といふ國と不可分である。天皇は日本の天皇であるし、日本は天皇があつての日本である。神勅を奉じて國が肇められたといふのは成程神話であるが、日本といふ國は、其の神話を正史の冒頭に置いて續いてきた。

日本の版圖は最初から今の版圖ではなかつた。平安時代に蝦夷を討伐するまでは東北地方は版圖として確立してゐたとは言ひ難いであらう。北海道や琉球諸島が版圖として確定するのは更に時代が下る。歴史的に連續して存在した日本といふ國は、天皇の知らし食す國、として括るより仕方がないやうに思へる。そして、皇統が萬世一系を保つて來たが故に、日本といふ國は一つのまま途絶えることなく存在してきた。

大曼荼羅御本尊について

酒井 景二郎

今僕の手元に、「大曼荼羅本尊御圖式要義」といふ本があります。これは日蓮宗で尊重される大曼荼羅御本尊（寫眞）について書かれた本です。僕はこの本を、田舎のお寺から、半ば盗むやうな形で分けてもらつてきました。ですからこの時點で僕は「不偷盜戒」を犯してゐることになります。こん

な者が大曼荼羅御本尊について何か書いていいものか、佛罰が下らないか不安ではあるのですが、この「大曼荼羅本尊御圖式要義」を臺にひとつ日蓮宗と法華經の一端について書いてみませう。とは言へ、僕は修行をした譯でもなく、日蓮宗信者としては甚だ至らない者です。ですからこの文も深く穿つたものにはならない道理で、眉をひそめられる方もいらつしやると思ひますが、何卒ご寛恕いただければと思ひます。

日蓮宗は、皆様ご存知の通り、日蓮上人（一二二二～一二八二）が、大乘佛敎の經典「法華經」（詳しくは妙法蓮華經。インドで成立したサンスクリットの原典を、鳩摩羅什（三三九～四〇九）が漢譯したもの）を根本經典として開宗した日本佛敎宗派のひとつです。開宗は建長五年（一二五三）のことと言はれます。日蓮宗を他の所謂鎌倉佛敎諸宗派と比較して考へ



宗教不信——なぜ？

押井 徳馬

「まるで宗教だ」。

昨今は、「宗教」といふ言葉の頭に「まるで」を附けた、この表現を見聞きする事があります。「マルチ商法なんて、まるで宗教だ」といふ具合に、大抵は、「騙されてゐる」「冷静な判断力を失つて、根拠もないのに信じてゐる」といつた否定的な文脈で用ゐられるやうです。

現代社会で「まるで宗教のやうなもの」がこのやうに非難されるなら、自家の宗教も同じやうに、いやそれ以上に非難されてゐます。

「宗教は金を巻き上げる悪徳商法だ」。

「宗教は屁理屈を理屈と言ひ張る」。

「宗教は数多くの戦争や人種差別を引き起こした」。

「テロを起こす危険な宗教も一部にある」。

「宗教の教へは非科学的だし時代後れだ」。

「子供に対する宗教の押しつけは良くない」。

「宗教は自立心の弱い人ががするものものだ」。

といった具合です。

この記事では、それらの意見のうちの幾つかを取り上げて考察

してみます。皆さんが自分自身の結論を出す上でのヒントになれば幸いです。

「宗教を隠れ蓑に」？

「宗教を隠れ蓑に悪い事をしてゐる連中が、あまりにも多い！だから宗教は危険だ！」

成程、或る意味さうかも知れません。たとへば、過去に東京の地下鉄で起きた毒ガステロは、宗教団体の指導的立場にゐた人々が、組織ぐるみで罪無き人々を殺傷したおぞましい事件として、多くの日本人の記憶に刻み込まれました。これまで宗教やらオカルトやらを面白をかくし記事や番組に取り上げてきたマスメディアも、この事件を境に「宗教は怖い」「宗教は人を騙して残酷な事をさせる」と、論調ががらりと変つた事を、私も思ひ出します。

でも、その結論で終りにする前に、一寸待つてください。「宗教は悪の隠れ蓑」とおっしゃいますが、「悪」が隠れる「隠れ蓑」まであからさまに「悪」と云ふのは、何かのギャグでせうか。宗教が羊のやうに大人しい善そのものに見えるからこそ、「隠れ蓑」

にも出来るといふものです。

言ひ換へるなら、先の言葉は、実際には宗教に良い印象を持つてゐる人が多い証拠ではないでせうか。そして、性格が温厚な人を「仏の○○」「○○は神」と喩へたり、「お坊さんとか牧師さんみたいに優しい話し方だ」と云ふ形容も、多くの人が宗教の表す善良さに気附いてゐる事を表してゐます。

宗教は戦争の原因になつてきたと非難される一方、敵国にゐる、宗教を同じくする同胞に銃を向ける訳にはいかぬと、宗教的信念から兵役を拒否して投獄されたり処刑された人も決して少くありませんし、宗教的理由等で兵役に就かない人が投獄されず代替業務を行ふ事の出来る「良心的兵役拒否」の制度は、キリスト教国の欧米を中心に整備されてきました。キリスト教は奴隸制と黒人差別を煽つてきたかのやうに語られがちですが、奴隸制に疑問を投げかけたストウ夫人や、奴隸を解放したリンカーン大統領も、黒人差別に反対したキング牧師も、キリスト教徒でした。

宗教団体は、ホームレスや災害の避難者に率先して炊き出しを行つたり、病院や孤児院を運営したりと、営利組織には難しい事もある慈善活動にも積極的に取り組んできました。

宗教が「平和」「博愛」「善行」「正義を愛する心」などを教へまた実践するのを、私たちはともすると「当り前」と思ひがちです。ですから我々は、宗教に「正義」を大きく期待するがゆゑに、宗教の名の下の不正義を見ると、よけいに許せないと感じるのか

も知れません。

「宗教に入信すると人が変わる」？

「宗教に入信すると、まるで人が変わるのが怖い」と言ふ人もいます。

変化といつても、「大酒飲みで暴力を振るふ粗暴な人が、羊のやうに温厚な性格に変つた」と云ふ変化であれば歓迎する人は多いでせうし、「ここまで人を変へるとは、畏るべき」と、良い意味でその宗教に畏れを抱くでせう。

しかし一般によく聞く意見とは、宗教団体の機関誌の体験談にありがちな、そのやうな変化ではありません。

たとへば、待遇の良い正社員の仕事からアルバイトに変へたり、名声の高い大学を受験しなかつたり中退してでも、宗教活動に多くの時間を費やすやうになる人が少なからずあります。仕事も勉強も嫌ひではないし、とても真面目にこなすのに、そんな「世間の名声」を蹴つて、宗教活動一筋にのめり込む様子を見て、周囲の人が「勿体ない人生だなあ」と言ふ事は珍しくありません。

しかしこれは、「どこにでもゐる普通のサラリーマンの人生」と比較した相対的な価値基準ではないでせうか。そして、そんなサラリーマンの人生はどうでせう。学生時代は引つ込み思案だったのに、社員研修を受けたり先輩と一緒に営業を行ふにつれ、積

オタクが語る正義と宗教

佐藤 俊

戦ふ理由

こんな奴らのために、これ以上誰かの涙は見たくない！
みんなに笑顔であってほしいんです！ だから見てください：
俺の、変身！

「仮面ライダークウガ」よりクウガに變身する五代雄介の臺詞。
これほど「ヒーローが戦ふ理由」を明確に示した言葉も無いと思
ふ。

雄介は敵怪人グロンギに父親を殺された少女の涙を見て、この
臺詞を吐く。

グロンギは人間を標的とした狩獵ゲーム「ゲゲル」を行ふ怪人
の集團である。「ゲゲル」を達成することで集團内の序列が決
まるのだが、超人的な力を持った彼らにしてみれば人間を狩るの
は容易い事で、だから条件を設け（何日中に何人、とか）難易度
の高い「ゲゲル」を達成することで實力を示す。

グロンギ同士の争ひは御法度であり、それを避けるために「ゲ
ゲル」を行つてゐるとも言へる。

だがグロンギがなんのために「ゲゲル」をやつて序列を決めて
ゐるかと言ふと、ライダーであるダゲバが復活したときその座を
賭けた挑戦権を得るためであり、集團として目的があつて行つて
ゐるわけではない。むしろ彼らは、人間狩りを行ふために超人と
なつたと言へるし、それを逡巡する様子も無い。劇中グロンギも
元々人間であつたことが語られるが、「力」に取り憑かれ、「ゲゲ
ル」を平然と行へるやうな人間だからこそグロンギになつたと
言へる。

まさに「悪の權化」と言へるグロンギだが、それに對抗する力
を持つクウガは雄介はどうか。

古代から復活したグロンギに對し、成り行きでクウガに變身し
戦ふことになつてしまつた雄介だが、最初は戦ふ氣になれなかつ
た。初めての戦闘を終へての感想が、「怪人であつても殴るのは
氣持が悪い」と言ふほど、人と争ふことが嫌ひな雄介なのだが、
冒頭に述べたやうに、犠牲者の遺族である少女の涙を見て、本氣
で戦ふ覺悟を決めたのである。

クウガは戦へば戦ふほど力が増していく。だがそれは、よりグ
ロンギに近づくことに他ならない。クウガはグロンギと戦ふため

にグロンギと同じ力を持ったためだ。雄介はそれを——人間でなくなつてしまふ」ことを恐れながら戦ふのであるが、時として——残酷な「ゲゲル」を行ふグロンギに對し、復讐するかのやうになぶり殺しにすることもあるが、決して雄介は力に溺れることなく、戦ひを楽しむことは無い。

最終決戦、つひに復活したリーダーダグバとの戦ひに際し、クウガは「究極の凄まじき力」を解き放つ。それはダグバと同じ——殺戮と破壊のみの存在となる筈であつたのだが、雄介の優しき心は力に飲み込まれることは無かつた。

決戦の最中象徴的な場面が描かれる。變身が解け、両者は血塗れの素顔で殴りあふのだが、ダグバは満面の笑みをたたへてゐる。文字通り戦ひを楽しんでゐるのだ。ダグバは雄介と戦ふ前に「もつとぼくを笑顔にしてよ」と要求する。まさに己の快樂のためだけに戦つてゐるのである。それに對し雄介は泣きながら拳を振るう。「誰かの涙を見たくない」がために、自らは涙を流すのだ。

劇中に於ても雄介は、『誰かの涙を見たくない』ために戦ふのはいいけど、雄介自身の笑顔はどうなるの?』と心配される場面がある。あくまでも雄介は自分以外のために戦ふのである。

そしてそれはクウガに限らず、全てのヒーローが戦ふ理由なのである。「自分の笑顔のためだけに戦ふ」悪と、戦ふ理由なのである。

「厨二」で悪いか

ネットコピペでこんなものがある。

正義の味方の特徴

- 1 自分自身の具体的な目標をもたない
- 2 相手の夢を阻止するのが生きがい
- 3 単独く小人数で行動
- 4 常になにかが起こつてから行動
- 5 受け身の姿勢
- 6 いつも怒っている

悪玉の特徴

- 1 大きな夢、野望を抱いている
- 2 目標達成のため研究開発を怠らない
- 3 日々努力を重ね、夢に向かって手を尽している
- 4 失敗してもへこたれない
- 5 組織で行動する
- 6 よく笑う

「あー、そーゆー見方もあるよね」と笑つて済ますやうなものだが、まじめに考へてみる。順番が逆になるが、「悪玉の特徴」

島田裕巳『なぜ人は宗教にハマるのか』(河出書房新社)

「14歳の世渡り術」シリーズとして、「宗教」「新宗教」「カルト宗教」といふ一見難しい話題を、中学生にもわかりやすく説明する。

現代の日本において、「宗教は怖い」といふ漠然とした印象を持つ人や、「宗教なんて自分と関係ない」と思ひ込んでゐる人は、きつと多いだらう。しかし、「科学の発達と共に、宗教は『迷信』とみなされて衰退する」といふ十九世紀の予言は当たるところか、二十一世紀の現代においても未だ大きな影響力を持つてゐる。宗教に縁がないと思つてゐる人でも、毎月祝ふ年中行事には大抵、宗教的背景がある。それに、歴史と宗教は切つても切れない密接な関係があつた。このやうに、誰もが避けて通れないものである。

宗教を信じるとは何なのか、宗教に入信するとはどのやうな事なのか。特に、自分の親しい友人や親族が他の宗教に改宗したといふ知らせを聞く時、そんな疑問が頭に浮ぶ事があるだらう。「あの人は宗教なんかハマつて、本当に大丈夫だらうか」と不安になる事もあるだらう。また、物心付いた頃から親と共に宗教グループに参加してきた人が、思春期になり「これで良いのだらうか、親に宗教を押しつけられてゐるのではないか」と疑問を抱く人もゐるだらうが、きつとそれらの答へを出すヒントになるだらう。

本書は「カルトはとにかく怖い」「宗教にハマるのは心の弱い人」といふ俗流宗教論に走る事なく、宗教の良い点も注意すべき点も比較的バランス良く取り上げてゐるやうに感じる。(押井徳馬)

稻垣久和・金泰昌編

『公共哲学16 宗教から考へる公共性』

平成十八年二月二十八日 東京大學出版會

平成十六年に開催された第53回公共哲学京都フォーラム「宗教と公共世界・公共宗教は可能か?」の発表・討論に基づいた本である。宗教から考へる公共性といふテーマで、韓國人とアメリカ人を含む様々な宗教や思想の研究者が参加してゐる。フォーラムといふこともあつて雑然とした本だが、基調として、政教一致の宗教や共同体・國家と密着してゐる宗教と、リベラリズムの宗教との對立軸が見て取れる。私はこれを現代の神道が置かれてゐる状況を見るためのものとして讀んだ。三十人近い参加者の中で神道界からの参加は唯一、當時國學院大學學長であつた安蘇谷正彦氏だけである。安蘇谷氏は平明な學風をもつ神道神學者だが、発表・討論ともに参加し、神道の立場を明確に打ち出してゐる。神道は他の参加者から國家神道や靖國問題、共同體的性格などが批判されてをり、安蘇谷氏がそれを一人で受けて立つてゐるが、その發言は神道の擁護といふより殆ど日本の擁護になつてゐる。普通に神道の本を選ばずこれを取り上げたのは、様々な宗教の對話の中で、神道及び日本人を主體的かつ客觀的に考へるのに好適と思つたからである。勿論、神道以外の宗教に關心がある人にも興味深く讀めるだらう。(高坂相)

支那思想で知つておくべきは、儒と老莊であらう。墨家は早くに減んで了つてゐる。法家や兵家は一般庶民にはちと縁遠いやうに思ふ。

本稿では、老莊内の老を取り上げてみることにする。内容は讀めば分るし、筆者が要約しても碌なことにならないだらうから、やらぬ。

構成は、章毎に、現代日本語譯、書き下し文、白文の順に本文が掲げられた後、解説が附けられてゐる。また、卷末にも別途解説が載せられてゐる。卷末の解説は老莊思想についての平易な入門になつてゐる。其處だけ讀んで概略を理解するのもありかも知れない。

筆者は『多言數窮』といふウェブサイトを慎ましく運営してゐるが、此の題は老子から採つたものである。言葉數が多いと碌なことにならないといふ位の意味だが、色々書き散らかしてばかりで、本當、碌なことになつてゐない。

「知る者は言はず、言ふ者は知らず」

「知りて知らずとするは上なり、知らずして知るとするは病なり」
かういふ邊りは、ソクラテスの無知の知と比べてみていいのかも知れない。(名賀月晃嗣)

西洋哲学とはつまるところ、プラトン対話編への膨大な注釈である」といふ広く知られた言葉からもその思索の深さが伺へる古代ギリシアの賢人プラトンが書き残した三編の対話編。西洋哲学の根底にある「善と悪」、「快と不快」を明確に峻別する姿勢はこの時点からも強く意識されてをり、これは案外日本人の疎いところである。

哲学のみならず、デイスカッションの重要性が説かれて久しい。今、相手の論理を助け、相手の同意を取り、それでも相手の納得のいく結論とは違つたものとなることを示すソクラテスの弁証法は「議論の進めかた」の参考にもならうし、また純粹に物語として觀ても面白い。ただ生きるのではなく「善く生きること」が寛容である脱獄を拒否し、友の眼前で毒を飲んだソクラテスの姿を、プラトンは生き生きと描いてゐる。(紫)

フォーレ『レクイエム』評

紫

Requiem aeternam dona eis, Domine,

et lux perpetua luceat eis.

Te decet hymnus, Deus, in Sion,

et tibi reddetur votum in Jerusalem;

Exaudi orationem meam,

ad te omnis caro veniet.

Kyrie eleison.

Christe eleison.

Kyrie eleison.

永遠の安息を与へたまへ、主よ

そして、絶え間ない光が彼らへと照らされんことを

あなたには讃歌こそが相応しい、神よ、シオンにて

そしてあなたには復誦されるであらう、誓ひが、イエル

サレムにて

聞き届けよ、私が語ることを

あなたのもとへ、全ての肉のあるものが至るであらう

主よ、哀れみたまへ

キリストよ、哀れみたまへ

主よ、哀れみたまへ（私訳）

本稿で評することになる『レクイエム』は十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、ガブリエル・フォーレによつて作曲された傑作であり、ひよつとすればクラシック音楽にそれほど親しんでゐられないかたにも知られてゐるほどの曲かもしれない。フォーレのこのすばらしい楽曲については様々なことを述べられるのだが、その前に『レクイエム』といふものについていくらか簡単に紙面をさくことにしよう。

カトリック教会において「ミサ」といふものがあり、それ

世界の國歌四方山話

かふし

曲の題名つて、歌ひ出しをその儘使つてるのか、單に便宜的に使つてるのか分らないんですが、何うなつてゐるの？

何うも今日は。小説が書けないので趣味に走りました。國歌好きが高じて幾つかの國歌が歌へるといふ事はツイッターでも呟きました。今回はその内譯を紹介してみようと思ひます。とは云へ、その實發音が怪しかつたり、一番しか歌へなかつたり、歌詞の意味は覺えてゐなかつたりしますが、尙、非獨立地域や亡國のもの等も含めてゐます。

折角なので拙譯の歌詞も掲載。

處で歌詞の無い國歌は歌へる内に入るのかしら。

アジア

「君が代」(日本、一九九九年法制化)

云はずと知れた日本の國歌。抑も國歌は西洋から興り、近代化の最中に各地へ輸入されたものの一つであるが、そんな中、十九

世紀迄に西洋的旋律に留まらない曲を作つた「君が代」は稀なケースなのかも知れない。他國で民族的旋律を採用してゐる國歌は其處迄舊くない。現行の國歌では一番邊りではウガンダの國歌が短い。同歌は三番迄あるので、全體として最も短いのは「君が代」であると思つてゐます。

次に載せる歌詞は、明治二十六年八月十二日文部省告示第三號別冊「祝日大祭日歌詞竝樂譜」より。但し「は」は「者」に由來する變體假名で書かれてゐる。

君が代は。ちよにやちよに。

さざれいしの。巖となりて。

こけのむすまで。

「愛國歌」(韓國、一九四八年)

北朝鮮のものとは題名が同じだけである。國歌制定前は「螢の光」の原曲でもある「オールド・ラング・サイン」に乗せて歌は

天皇の存在意義

野中 浩大

天皇の御存在の意義は果して何であるか、或る保守系論者はこの疑念に対して歴代天皇の幾人かの例を挙げてその御人徳に対してそれを見出した。だがさうであるならば、若し仮に天皇が『日本書記』の伝へるが如き武列天皇のやうな不徳の御方であらせられたならば、彼等はそれを以て『天皇不要論』に墮するのかと云ふ疑念を生ぜざるを得ない。然るに、皇統は如何に御人徳に難ありとされる天皇御君臨あそばされたりと雖も、事実としてかうして萬世一系肇國以来連綿として今に至つてゐるのである。日本の天皇は聖人君子の徳を以て皇位を受けられるのではなく、血統に基いて天皇になるのであるから、天皇の聖徳は天皇の御治績や個人的御人徳にあるのではなく、何かそれ以上に特別な根本的永恒の価値を認めねばならぬ筈である。諸外国の帝室或いは王室との根本的な違ひがそこにはある筈であるが、それは一言で云ひ表すとすれば、皇統が肇國以来萬世一系であると云ふことにある。ただ、それは皇統が諸國のそれと比較して古く珍無類である

ことが我が皇室の尊い唯一の所以ではない、その皇統の内容に尊嚴なる國體があり、この國體と共に榮え國體の具現者であらせられる儀表人格の歴史的連続であるからこそ、仰いで尊き神聖なる天皇であり御皇室と為すのである。國體事業の主として道と共に榮えある萬世一系の天皇であるからこそ、我等臣民は万邦無比のものとしてこれに翼賛すべきであると云ふべきであらう。ではその万邦無比の尊嚴なる日本國體とは何かと云へば、即ち國家の窮極的基體たる日本民族社会である。民族は云ふまでもなく民族社会として存在し、日本民族の場合それを皇御國に求めたのであるが、民族社会は第一に體質の共同社会であり、文化共同体であり、場所の共同体であり、物語の共同体であり、そして以上の性質の一体化作用に基く生命体的統一社会である。これは如何なる民族と雖もほぼ共通して云へることであらうが、世界広しと雖も有中枢的民族社会と云ふべきものはただこの我が日本にのみ存在すると云つて良い。詰り、世界諸民族の共同社会はその窮極

私の福田恆存論

野寄 健秀

誰かを論ずる時、その人が到達したところから出発しなければならぬとは福田恆存が何処かで述べてゐた事だ。福田恆存を論ずるならば、吾々もまた福田恆存が到達したところから出発しなければならない。

シェストフやニーチエを経て福田恆存がD・H・ロレンスに自らの出発点を見出した事は知られてゐる。多くの人がロレンスの影響下に文学を論じ始めた初期の福田恆存を高く評価してゐる。けれども、それは飽くまで出発点の福田恆存だ。彼等が「衰へた」と極附ける晩年の福田恆存を、寧ろ私は愛好する。そして澄み透つたやうな文体に到達する迄の福田恆存の歩みを、私は辿つて、私の福田恆存論を始めみたい。

昭和二十年代の福田恆存は、確かに文芸評論家として認知されてゐた。『黙示録論』の翻訳を『現代人は愛しうるか』の題で刊行し、チャタレイ裁判に特別弁護人として出廷した

福田恆存は、一面、ロレンスの思想に従つた、言はずロレンス信者としての容貌を見せてゐた。勿論、それは福田恆存の一面を捉へてゐる。

けれども、福田恆存が既に雑誌の懸賞に戯曲を応募し、或はシェイクスピアを論じてゐたのも事実なのである。ロレンスは、少数の戯曲も書いてはゐるが、多数の詩を書き、何よりも大量の小説を書いた小説家だつた。福田恆存は小説家ではない。

着目したいのは、そのシェイクスピア論なのである。

昭和十三年に福田が書いたシェイクスピア論は、ブラッドレーに反論する形で「マクベス」を批判する内容となつてゐるが、T・S・エリオットのハムレット論を大いに意識してゐる形跡が見られる。ブラッドレーに対する反論と見るよりも、エリオットに対する反論と見た方が良い位だ。さうした背景を考へながら『人間・この劇的なるもの』を読んでみる

ニッシヤのもとに集へ!!

伊川 清三

—
秋の陽射しは實に穏やかであつた。カーテンを開けると、柔らかな朝日が部屋に射しこみ、スミダ・カットシは思はず目を細めた。

寢間著から著替へるに、すぐさま臺所に向かつた。臺所に工業用アルコールと渾名せられてゐる合成清酒のビンと、飲みかけの湯呑が放置せられてゐる。昨日の晩酌の残りである。

彼は飲みかけの湯呑をすすぎ、桶に水を張り沈めた。洗ふのは歸つてからでよからうといふ考へである。

そして、棚から新しい湯呑と代用緑茶の容器を取り出した。代用緑茶は残りわづかである。また、補充しなければなるまい。奮發して本物の緑茶を買はうかと一瞬考へるも、結局いつも安價で豊富なそれを買ふのが常であつた。

代用緑茶と、昨日の残り物をテーブルに置いた。毎日變はることのない、彼の朝食である。

朝刊を取るために玄關に向かひ、ドアポストに手を突込んだところで、今日は休刊日であることを思ひ出した。

舌打ちしてきびすを返し、そして、テレビのスイッチを入れ、國營放送にチャンネルを合はせた。

『——全國の天氣です。まづはカントウ地方の天氣です。おほむね晴れるでせう。南部では午後から雲が多くなりますが、雨の心配はありません。氣温は平年どほりですが、雲が多いカントウ南部では、氣温より寒く感じられるでせう。續いて、トウホク地方です——』

溫め直したご飯をかきこみ、代用緑茶で流しこむ。相變はらずの不味さである。濁り水を啜つてみると變はらない。一體どこが代用なのかと頭を傾ぐに値する不味さである。

洗面所で、洗顔し髭を剃る。やや曇つた鏡に疲れた自分の顔が映つてゐる。

慌ただしく準備を終へて、彼はアパートから出た。秋の朝の寒さには思はず身をすくめてしまった。そろそろ、薄手のコートを準備

備するべきだらう。寒さが身に堪へる。

ペンキが完全にはげてゐる手すりが目についた。いいかげん塗り直すべきだとは、この公営住宅の入居者全員が思つてゐることである。しかし、豫算不足に悩まされる管理組合はペンキを塗り直すことまで手が廻らない。手すりどころか、最近は壁の漆喰やコンクリートの剝離が目立つやうになつてきたのは決して氣のせいではない。

階段を駆け足で下りると、管理人の老婦が日課である掃除に精を出してゐた。

「おはやうございます」

「あら、おはやうございます。いつてらっしゃい」

決まりきつた挨拶を交はす。

敷地の入り口にある、公営住宅の掲示板に目新しいポスターが張つてゐるのが確認せられた。

「もえるゴミ お あつめる ひ が かわり ます。 11が
から、 もえるゴミ の あつめる ひ わ ゲツヨウビ と
モクヨウビ に かわり ます ので、 き お つけて くだ
さい」

既に廻覽で知らされてゐるゴミの収集日の變更告知であつた。彼は足も止めず、そのまま地下鐵の驛へと急いだ。

始業のちやうど二十分前に會社の自分の机に著いて、特別な聯絡事項がないかを確認するも、自分に關係するものはなかつた。

坐るとまるで自分の到着をば持つてゐたかのやうに、電話のベルが、一種のヒステリックを想像させるやうに鳴つた。

顔つきが一瞬ひきつる。始業前の時間に来る電話などろくなことではないのである。彼は電話を取るに逡巡したが、澁々それを手に取つて。

「もしもし——」

『あー。スミダさんかね』

山羊のやうな聲が電話の向かうから聞こえると、彼は血壓があがつた。それでも落ち著き拂ひ、

「カナダ先生ですか。お世話になつてをります。どういつたご用件で」

『うん、あのね。原稿の件だがね——』

彼は申し譯なささうに切り出した。胸の中で暗澹たる感情が湧き起ると、さらに血壓があがり、心なしか受話器を持つ手が震へ始めた。

「はい、原稿が」

『いやね——少し遅れさうなんだよね』

向かうは捲くし立てるやうに言つた。「遅れさう」といふ言葉を聞いたとき、彼の顔は瞬く間に紅潮したのである。罵言が出さうになるもどうにか呑みこむ。

121. 地震に伴ふ發光現象に就て

寺田寅彦，帝國學士院會員
地震研究所

(1930年12月12日)

大地震の際、本震の直前から直後にかけて、空中や地上での様々な發光現象の觀察がしばしば報告されてゐる。我が國の歴史的文書の中には、そのやうな現象の例が澤山見附かり、早くは西曆869年に遡るものもある。しかしながら、ヨーロッパやアメリカの地震に関する文獻では、似たやうな例は殆どない。興味深いことに、發光現象の主要な特徴については、洋の東西を問はず記述が一致してゐる。しかしながら、これらの記録は科學的には殆ど無價値と思はれてゐた。發光現象の原因として、遠くでの稲妻、火事、近年では電送線のショートによる光などがあり得るとされてゐる。とは云ふものの、このやうな月竝みな説明を否定するやうに見えるケースも残つてゐる¹。これと同じ範疇に屬する發光現象が、1923年の關東大地震や1924年1月15日の東京での大地震でも觀察された。1930年11月26日に伊豆地方で起きた直近の地震でも、同様の發光現象の觀察證言が様々な方面から齎されてゐる。Musya氏は隣縣の中學校の生徒達から700程度の證言を蒐集した。筆者は、偶々このやうな稀な現象を觀察した多數の物理學者から、最も信に足る記録を得ることに成功した。これらのデータを吟味するに、筆者は、この現象は地震と直接つながる物理的現象かもしれないと思ひがちになつてきてをり²、説明の手掛かりに

¹例へば、A. Seiberg and R. Lais, Das mitteleuropäische Erdbeben vom 16 Nov. 1911.

²詳細は地震研彙報に掲載豫定。